

一地域在住高齢者における身体的・精神的・社会的健康の維持とペット飼育との関連の検討 - K町悉皆調査 -

著者	片寄 亮
発行年	2015-03-10
URL	http://hdl.handle.net/10422/10212

氏 名	片 寄 亮
学 位 の 種 類	修 士 (看 護 学)
学 位 記 番 号	修 士 第 1 8 5 号
学位授与年月日	平成 2 7 年 3 月 1 0 日
学位論文題目	一地域在住高齢者における身体的・精神的・社会的 健康の維持とペット飼育との関連の検討 - K町悉皆 調査 -

論文 内 容 要 旨

※整理番号	190	(ふりがな) 氏 名	かたよせ 片寄	りょう 亮
修士論文題目	一地域在住高齢者における身体的・精神的・社会的健康の維持と ペット飼育との関連の検討-K 町悉皆調査-			
<p>【目的】一地域在住高齢者におけるペット飼育と身体的・精神的・社会的健康との関連を横断的に検討することを目的とした。</p> <p>【方法】平成 25 年 4 月時点で K 町に在住していた 65 歳以上高齢者のうち、入院・入所中の者及び要介護認定者・申請者を除く 5,401 名を調査対象者とした。平成 25 年 4-5 月に調査対象者へ調査票を郵送依頼し、未回答者に対しては訪問調査を実施した。調査協力の得られた者は 5,094 名（応諾率 94.3%）であった。そのうち既往歴や直近の入院歴があった者、さらに主要変数に欠損のあった者を除外した 3,350 名を本研究の解析対象者とした。主要評価指標はペット飼育項目（飼育の有無・飼育者・種類・関わる時間）、厚生労働省が作成した基本チェックリスト 25 項目、主観的健康感、社会活動・交流関連 3 項目（友人宅訪問・ボランティア活動・地域活動）とした。応答変数として身体的健康を運動機能、精神的健康を認知機能・うつ傾向・主観的健康感、社会的健康を閉じこもり傾向・社会活動・交流と定義した。説明変数は「ペット飼育者（飼育していない・家族飼育・本人飼育）」と「ペット飼育状況（飼育していない・家族飼育 1 日 1 回未満・家族飼育 1 日 1 時間未満・家族飼育 1 日 1 時間以上・本人飼育 1 日 1 回未満・本人飼育 1 日 1 時間未満・本人飼育 1 日 1 時間以上）」とし、説明変数（いずれも[飼育していない群]を参照水準）における各応答変数（運動機能低下あり・認知機能低下あり・うつ傾向あり・良好な主観的健康感・閉じこもり傾向あり・活発な社会活動・交流）のオッズ比及び 95%信頼区間を性・年齢・調査方法（郵送・訪問）・慢性疾患の有無・運動制限の有無を調整した多重ロジスティック回帰モデルを用いて算出した。</p> <p>【結果】解析対象者の約 6 割が女性、平均年齢±標準偏差は 75.4±6.9 歳（後期高齢者は約半数）であった。ペットの飼育割合は全体で 638 名（19.0%）であった。ペット飼育による各応答変数の該当頻度は(1)運動機能低下者は本人飼育群で 0.70 倍、本人飼育かつ 1 時間以上/日関わる者で 0.70 倍、(2)良好な主観的健康感である者は本人飼育群で 1.43 倍、本人飼育かつ 1 時間以上/日関わる者で 1.67 倍、家族飼育群で 0.72 倍、(3)閉じこもり傾向の者は家族飼育かつ 1 回未満/日関わる者で 1.95 倍、(4)活発な社会活動・交流である者が本人飼育群で 1.33 倍、本人飼育かつ 1 時間未満/日関わる者で 1.43 倍であることが示された。しかし認知機能及びうつ傾向との関連は認めなかった。</p> <p>【考察・総括】ペットの世話を自ら行っている地域在住高齢者は運動機能・主観的健康感・社会活動・交流が良好に維持されており、特にペットと関わる時間が長い者はその傾向がより強くなる可能性が考えられる。そのため地域在住高齢者の身体的・精神的・社会的健康を包括的に促進させるためには「ペット飼育」が効果的な役割を果たす可能性が示唆された。しかし本研究は横断調査であり因果関係について言及することはできない。そのため今後は追跡調査によってペット飼育が地域在住高齢者の身体的・精神的・社会的健康の維持に影響を与え得るのか検討することが求められる。</p>				

- (備考) 1. 研究の目的・方法・結果・考察・総括の順に記載すること。(1200 字程度)
2. ※印の欄には記入しないこと。